令和４年１０月２１日　資料№7
区 民 文 教 常 任 委 員 会

図書文化財課

令和４年度港区指定文化財の指定について

港区文化財保護条例第４条の規定に基づき、令和４年度港区指定文化財を下記のとおり、指定しました。

１　経緯

令和４年　８月　９日　港区教育委員会から港区文化財保護審議会へ諮問
令和４年１０月　３日　港区文化財保護審議会から港区教育委員会へ答申
令和４年１０月１２日　港区教育委員会において審議、決定
令和４年１０月１３日　港区教育委員会告示

２　指定文化財

（１）種　　別　有形文化財　絵画　（別紙１）
名　　称　紙本着色琴棋書画図屏風（しほんちゃくしょくきんきしょがずびょうぶ）　六曲一双
所 有 者　種徳寺（しゅとくじ）
所在の場所　港区白金台四丁目６番２号

（２）種　　別　有形文化財　彫刻　（別紙２）
名　　称　木造歴代上人坐像（もくぞうれきだいしょうにんざぞう）　３０躯（く）
所 有 者　増上寺
所在の場所　港区芝公園四丁目７番 35 号

（３）種　　別　有形文化財　歴史資料　（別紙３）
名　　称　日本楽器製造株式会社製初期グランドピアノ　１台
所 有 者　港区教育委員会
所在の場所　港区赤坂六丁目６番 14 号

（４）種　　別　有形民俗文化財　（別紙４）
名　　称　赤坂氷川祭の山車人形　附　山車附属品　８組
所　有　者　赤坂氷川山車保存会
所在の場所　港区赤坂六丁目 10 番 12 号

３　周知方法

（１）広報みなと　　１１月１日号に掲載
（２）ミナトマンスリー　　１１月号に掲載
（３）港区ホームページ　　１１月１日に掲載
（４）港区立郷土歴史館ホームページ　１１月１日に掲載
（５）ツイッター　　１１月１日に発信

別紙１

有形文化財（絵画）

紙本着色琴棋書画図屏風　　六曲一双

紙本金地着色、金砂子ちらしの六曲一双屏風。法量縦 154.8cm、横 327.6cm で右隻・左隻ともに「興以」の朱文方印一顆を有する。落款はないが、狩野派の絵師・狩野興以（生年不詳～1636）の筆によると考えられる。中国の高士が身に付けるべき四芸として尊ばれた「琴棋書画」を主題とし、右隻に琴に興じる高士とそれを聴く人々、舟上で棋をさす高士、左隻に書を嗜む高士に、絵筆を2本持ち岩間の水流を描く高士が描かれる。人物が多数登場するがそれぞれの表情は豊かであり、細かく個性の描き分けが行われている。また人物の衣服には金泥で模様が施され、人物や岩、樹木の周囲にはふんだんに色合いの異なる金砂子が散らされているなど、装飾的な要素も見て取れる。

興以は狩野探幽・尚信・安信の後見として教育にあたり、狩野派の進むべき方向を示唆したと考えられるが、基準作となる現存例が少なく比較検討が難しい。そのような中で「興以」の印を持つ本屏風は、師・狩野光信没後、探幽台頭以前の狩野派の画風を伝える作例といえる。なお種徳寺には興以の墓と、彼に連なる紀伊狩野家代々の墓が存在し、墓所へ向かう階段脇には、この墓を発見した岡倉天心による石碑も残されている。同寺が本屏風を所蔵したのは戦後であるものの、興以とのつながりは深い。港区として貴重な資料であるだけでなく、いわゆる江戸狩野派の初期を支えた興以の研究、ひいては狩野派研究の進展も期待できる。

別紙２

有形文化財（彫刻）

木造歴代上人坐像　　30 躯

増上寺三解脱門の階上に安置される歴代上人坐像、全30躯。像高は 45.4～52.0 ㎝、檜材の寄木造。胡粉下地に彩色を施し、玉眼を嵌入する。また各像の首枘や襟の内側、裳先裏に歴代や名称が記され、像主を特定することができる。30躯のうち28躯は第 3、5、9～11、15～31、34～38、40 世の上人像で、2躯は像主不詳である。

「三縁山志」巻2によると、もとは寛永 10（1633）年造の同寺開山堂に安置されていた。かつて開山酉誉聖聡の像を中央に、左は中興 12 世源誉存応、右は 17 世照誉了学の三厨子が正面須弥壇上に安置され、南北に歴代の上人像が安置されていたという。「享保年中の後は像を略し位牌を並ふあり」の記述があるように、享保 20（1735）年に没した 40 世衍誉利天の像を最後とする。開山堂が東京大空襲で罹災した後に三解脱門へ移されたものと考えられる。現在は門階上の釈迦三尊像と十六羅漢坐像の前に、向かって左に 14 躯、右に 16 躯の計 30 躯が安置される。

このうち数体には体内納入品や銘文があり、仏師や制作年などを知ることができる。少なくとも16世（寛永 9〔1632〕年銘）以降の各像は在位中あるいは没後すぐに制作されたと考えられ、仏師は京仏師や江戸在地の仏師などさまざまである。各像の相貌は老若を表現し、各々の人となりを写す意が感じられる。制作時期や仏師は異なるが、像高や像容に統一感があるのは、開山堂安置という目的のために制作されたからであろう。なお歴代上人像と一連の並びで安置される像主不詳の僧形坐像1躯のみ保存状態が異なっており、平成 20（2008）年に「木造僧形坐像」として指定されている。いずれも港区の歴史に欠かせない貴重な文化財といえる。

別紙３

有形文化財（歴史資料）

日本楽器製造株式会社製初期グランドピアノ　　1台

このグランドピアノは日本楽器製造株式会社（現ヤマハ株式会社）製で、幅145㎝、奥行 185 ㎝、高さ 98 ㎝（屋根を閉じた状態）、85鍵盤、標準的なサイズである。全体を黒漆塗とし、側板には金平蒔絵で有職模様を、金属フレームには漆焼付で菊唐草模様をあらわす、といった日本の伝統的技法を用い、曲線的な譜面台や脚部など、豊かな装飾性が特徴である。旧氷川小学校が昭和５（1930）年の校舎建て替えの際に、同校の向かいにあった九条家から「皇大后使用のピアノ」として寄贈を受けた。九条家は大正天皇の皇后となった九条節子の実家である。

フレームには「YAMAHA PIANO Co.」とロゴが入り、鍵盤蓋裏には「Yamaha Co.,」と筆記体で記されているが、製造番号は確認できていない。同社がグランドピアノを完成させたのは明治35（1902）年で、以後国内外の博覧会に漆塗蒔絵や梨子地七宝などの装飾をほどこしたグランドピアノを出品し、宮内省や文部省など官公庁への納入を行っている。また側板にほどこされた模様が、博覧会出品のために作成された同社の図案集の一部と合致するため、博覧会出品用として製造された可能性が考えられ、同 36 年第5回内国勧業博覧会出品の同社グランドピアノはこのピアノに類似している。

博覧会や皇室との関わりが考えられる最初期の国産グランドピアノと推測され、側板やフレームにみられる装飾は現存唯一のものと考えられる。日本におけるピアノ産業史の一幕を今日に伝える貴重な資料であるとともに、旧氷川小学校で長らく使われていたことなど、港区の歴史を知る上でも貴重な文化財といえる。

側板とフレームの装飾

別紙４

有形民俗文化財

赤坂氷川祭の山車人形 附 山車附属品　　8組

山車人形は祭礼の神輿に供奉する山車を飾る人形で、江戸時代後期に多く製作された。江戸時代の赤坂氷川神社の祭礼は山王祭、神田祭に次ぐ大祭で隔年6月15日に行われ、基本的には宮神輿と赤坂21ケ町の産子町がだす江戸型山車13本と附祭が巡行した。「猩々」「猿」「翁」「源頼義」「恵比寿」「神武天皇」「翁二人立」「日本武尊」の8組の人形は、幕末から近代にかけて製作され、江戸・東京の山車人形の製作事情・構造を知る上で貴重な資料である。山車人形は、祭礼に使用されるため後世何らかの修理が施されている例が多いが、人形をはじめ飾り幕や高欄、額、小道具類などの附属品を含めて、本資料の多くはほぼ製作当時の状態を保っていると考えられる。弘化2(1845)年の「翁」、同3年の「源頼義」(共に松雲斎徳山作)は、「日本武尊」とともに、江戸の山車人形師の技を伝える。さらに大正4(1915)年の「神武天皇」や昭和初期の「恵比寿」は、東京 23 区内の祭礼で山車が衰退した 20 世紀に、江戸の祭礼の面影が港区赤坂に生き残っていたことを示す。

都心部の山車は近代以降、老朽化や震災、戦災などによりそのほとんどが失われ、多くが関東の地方都市などへ流出した。そのなかで本来の地に現存する本資料の稀少性は高い。なお平成 18(2006)年以降に祭礼が復興され、人形や飾り幕の修復、山車の製作が順次進められ、神輿が新調された。現代の赤坂氷川祭では資料保全のためレプリカの人形を用いて巡行が行われ、地域の振興と交流に寄与している。いずれも港区の歴史・民俗を知る上で貴重な文化財といえる。

源頼義

日本武尊